

研修報告 日本史サマーセミナー2022

横浜国際高校 生田 幸士 明治大学大学院 矢野 暁

はじめに

8月19、20日に向け横浜翠嵐高校を会場に日本史研究推進委員会による日本史サマーセミナーを行い、生徒、県内外教員、大学・教育関係者多数の参加を得た。全体テーマとしては、今年度から実施された新科目「歴史総合」からどのように発展的に新科目「日本史探究」へと接続を図るかを設定した。午前の大学教員による最新の研究成果を反映した講義、また午後の研究協議でも熱こもる議論が展開され、充実した二日間となった。

1 1日目の講義・協議内容について

1日目は、午前日本女子大学の成田龍一先生による「第一次世界大戦と日本 デモクラシー・総力戦・大衆化」と、東京経済大学の戸邊秀明先生による「タコライスは和食？洋食？～沖縄料理から近現代史をのぞき見る～」の講義をしていただいた。

成田先生の講義では、第一次世界大戦後に不戦に向け新たな国際秩序が模索され構築されたにも関わらず、なぜまた第二次世界大戦へと世界は向かってしまったのかを、日本史の視点からアプローチする講義が行われた。そこで焦点化された対象が総力戦である第一次世界大戦後に出現する“大衆”の動向であった。講義では、同時期の大正デモクラシーを民本主義の時代（1910年代）と改造の時代（1920年代）にとらえ、民衆の政治参加を求める運動が勃興するとともに（1910年代）、新たに政治勢力となった民衆の世論（民衆感情）が輿論（公的意見）としての力を内在化するようになった民衆の大衆化の過程（1920年代）を雑誌やラジオなどのマス＝メディアを通して確認した。そうして形成された大衆社会（大正デモクラシー）が、1930年代にデモクラシーの経験から総力戦（総動員体制）へと移行する「連続性」を、吉野作造・信次兄弟に着目し考察した。まさに「歴史総合」が対象とする「国際秩序の変化や大衆化と私たち」の時代の講義であった。

戸邊先生の講義では、タイトルにもあるように沖縄の“食”に着目し、沖縄を取り巻く近現代史を俯瞰する講義が展開された。戸邊先生は講義を行うにあたり、冒頭「この問い（沖縄料理の分類）への答えで、私たちは何を知りたがっているのか、わかったことになったがっているのか」と問いかけた。この問い自体が沖縄史を不可視化するおそれがあることを指摘し、無条件に問いを受け入れようとする生徒のステレオタイプを揺さぶり、「歴史総合」が重視する「私たち」の視点から講義が展開できるように試みられた。講義では、琉球処分により日本の南端として砂糖生産に特化したモノカルチャー化によってもたらされたソテツ地獄という「飢え」の時代が、アメリカ統治下の中で飽食化し、そして本土復帰後の基地に代わる観光振興の中で形成されたアメリカナイズされた沖縄“食”の、家庭料理・伝統食“化”。まさに、琉球処分以降のヤマト世、沖縄戦によるアメリカ世、そして本土復帰による再度のヤマト世という沖縄が歩んだ「世（ゆ）替わり」の歴史を考察した。“食”という資料を通し、その背後にある基地問題や文化、そして人々の健康問題までもが人為的に創出されることを明らかにする「歴史総合」の「歴史の扉」の講義であった。

午後の研究協議では、歴史総合の構成分析、教科書比較を日本女子大学の酒井晃先生から、実際の授業実践の視点から横浜翠嵐高校の矢野慎一先生に報告いただき、研究協議が行われた。

2 2日目の講義・協議内容について

2日目は、午前の方に、法政大学の今泉裕美子先生による「ミクロネシアにつながる神奈川～旧南洋群島との関係を中心に～」、一橋大学の石居人也先生による「『文明』がモノをいう社会～19世紀後半の日本列島を生きた人びとにとっての近代化を考える～」の講義をしていただいた。

今泉先生の講義は、ミクロネシアと日本の「つながり」に注目し、「私たち」のものの見方を問い直すものであった。第一次大戦後の日本の統治という「つながり」とともに、神奈川との「つながり」として、横浜港、沖繩戦、「第五福竜丸事件」に注目し、説明がなされた。最後に、現代の問題として、2021年、北マリアナ諸島における、福島汚染水の海洋放出に対する反対決議を取り上げ、この「問いかけ」に私たちはどのように「つながる」か、と生徒に問いを投げかけた。そして、ミクロネシアと日本は、核に対して異なる歴史から反対してきたとし、歴史にねざして「つながる」ことから考察する必要性を強調した。

石居先生の講義は、文明開化期の日本社会を対象とし、「文明」という変幻自在な概念に対し、人びとがどのように向き合い、変化していったのか、「違式誑違条例」や地域有力者の受容の様子など、具体的な事例をもとに説明された。また、肥大化する「文明」の側面として、「衛生」、日清戦争、「人類館事件」が取り上げられた。東京・神奈川という、生徒にとって身近な地域の史料を用い、「文明」をめぐる人びとの動きを、「概念」と「地域」に注目し、「歴史総合」の柱の一つである「近代化」について考察する試みであった。

午後の部では、信州大学の大串潤児先生による「歴史総合」から「日本史探究」へ、愛川高校の松澤友秋先生から「歴史総合」の授業実践が報告された。大串先生の報告では、これまで蓄積された歴史教育論をもとに、「探究科目」の構成、位置づけを整理し、「歴史総合」と「探究科目」の接続が考察された。特に、「問い」に注目し、「通史叙述」・「通史学習」との関係から論点が提示され、「歴史総合」で生じる「生徒の問い」を、いかにして歴史学の「ことば・対象」、「問い」に接続していくか、つまり、学校現場から歴史学への問題提起という営みの重要性が指摘された。次に、松澤先生の報告では、「歴史総合」の授業を行ううえで意識したこと、実践によってみえた課題、生徒へ提示した「問い」について、実際に使用した授業プリントをもとに説明された。

1日目、2日目の研究協議を通して、「歴史総合」および「日本史探究」に関して議論が深められた。1日目の議論は、「歴史総合」を中心に進められた。「問い」に関する議論では、戸邊先生から、「問い」をある時点で「問い」のままにしておく必要性が述べられ、そのことを通じて「問い」の共有がなされることが望ましいとされた。また、「歴史総合」の教科書叙述・史料が、現場の実践・生徒の「問い」を経て、どのように発展するかという点が教科書執筆者側の課題として提示された。2日目の議論のテーマは、「歴史総合」から「日本史探究」への接続であった。大串先生からは、「日本史探究」と「日本史B」を貫く問題について、「通史」との関係から論点が提示された。また、「日本史B」における論点、実践の蓄積について、あらためて点検・学び直しをする必要があると指摘された。

おわりに

「歴史総合」は、今年度から各学校で試行錯誤のもと実践がなされている。サマーセミナーでは、その課題が共有されるとともに、意義や可能性が改めて認識された。今回の議論をさらに発展させるためには、「歴史総合」の実践の継続的な蓄積と共有、歴史学と学校現場のつながりの深化が必要となるだろう。今後の進展が期待される。